環海異聞

ル 2
1368
5

門 呂
滿 1368
卷 下

環海異聞卷之四

飲食第二

食事八日ニ三度用ル粥ハ粳米ニ糯米ヲ交ル飯ハ糯米ニ粳米ヲ交ル
ヒルヨリ夕ニ至テ飯ヲ食ス其ヲカズ三度ニ過ル事ナシ
夕ハ二度ノ飯ヲ食ス
肉ハ鹿ノ肉ヲ食ス

環海異聞巻之四

飲食第二

食事ハ日ふ三度用ゆ粗き小麦の蒸餅少食ひて茶を飲むをなり 是ハ寺社日中のほとめの濟むを定規ふ食事を拾い五ッ時なり 二度ハ本式なり 裸麦の蒸餅と牛肉の羹を用ゆ

一麦餅を「ケレブ」といふ 也俗にパンといふものゝ和蘭いブロート上といふ事なり
常食ふして裸麦の粉を蒸焼ふしたるもの
麦の粉は類皆水車を以て石磨にて挽
するなりイルコーツカ」より先き都府(ミヤコ)にの互
中にて風扇(カザイ)にて挽せるといふ
一ケレブ餅蒸の法い定法のごとく麦は粉を水ふ
和し煉(ネリ)揑(テツ)して餅となし蒸やはふする者
なり正平焼するして揑しうすめらるゝもの二ツ三ツ
拵し炉へ置日を經て味変するをまちて出
出しやきて少し食ひ試むるふ稍(ヤヽ)酸(スミ)味を生
するなり此時出るもの物を以て数多蒸て
乃の多飴(アメ)と称して板ケレブを作るふい麦
の粉行升をぬるゝ湯にて交せ合せ団へ
たれ酸味出るもの餅(モチ)堤(テ)を細ふ碎きて是
と和しかき口し釜へ置時刻の定限にて
日きき立なり又ふれとよく〳〵かきまぜし又

ゆふ水と粉とを塩し加へ手にて捏(テツ)して
餅とあるの度を作るべし 中にをとり餅(モチ)塊ふ
作る大ふいんまるせふ まるなり 手にて大小塊を竈
の内ふ並べてあるやけこのうへの上へ並(ナラ)べ蒸燒
ふまるべし 灶(ヒドロ)の形ふいくしめ竈の内ふ下地へ
磚(カハラ)を敷き並べ作るものを也 中角にて餅を
焼きもるなれふ 尾 焼天となりてあり 内ふ
あるたきあるしの大きふ 小きくうへ出し 梅菓の

皮ふ松の枝本を束稲等となしもるものふ
水をそそきて 手にて撫 尾の上をきれいふ掃除を
なし手上ふ 餅をなべて蒸燒ふまるべ 尾ふ
あるより 撫氣強けれふ 餅ふ上へ 焦して大
氣内ふ透べす 細孔多くもち 其孔大きく 手
て不宜 偏て手大 加減を試むるふ 先ッ掃除
しもる 尾の上へ 粉をあつこけ 又ふ大撫つよ
くれふ 粉やけてもうえあるべ 如此なれふ 又合せ

唯生粉のまゝにて食つきらるる中あるは片ふ生麩上
ふ餅と並れい粉〻〻蒸やき生麩あるゝ宜く
出来る物い饅頭の法れめくふなる赤内餡の
粉と考へ一七日計り用ゆ〻きを つ麩ふ米〻置
なり此物軽夕の食料みて用る時小力みて
麩〻きて食ふ生こうふ加茶不加茶あり
細力い麩く米麩〻あるやつふ裁ると宜しすす
仕制もしざるものい高低麩屑生果て乙苦し

きなり
小麦のケレプ蒸餅法お遠せり先器ふ
水を入れ小麦の粉を生内ふ投し掛せ麦
湯の塗少し加へてこきらめて置宵の内如時して
とけい粉三斤ふ入り湯立又ふれ紙き四〻〻
うへふ麩ふ粉を塩し加へて湯あるを加つ事
押付〻して惰じ揑しらる〻程ふ成し大小重
次第の堤ふ似り竈の内熱灰上ふ並べむし

やきふすまるの前法のごし抜出小麦のケレコハ
常ふハ多く食すす祭日なるふ用ゆ日抱常食
ふして靴澤しして あしことしふ市中賣物ふハ
平ら生ふあり先ハハ業類ぐひふすることちふんゆ
一牛肉ハ以地方の常食なり 牛の無名をコロビとしふ
牛をベイゴビトしふ
生ふふハ牛駅しく飼ひ置市中へ賣りのふ生を
澤山ふ持つものハ五六百より手足位まて養ひ
置者あり 永年野牛の類をも畜置者也

来りて牛店に賣渡す抜牛屋ハそれを屠る
ふハ大なる鉞ふて前項ふ向ひ力を極めて打ッ是
ふてよろしくしあるを吭と指通し殺すなり
それより皮を剥き肉をそれ〳〵ふるもつ脆腑も
ふて〳〵を食料とする肝の猛ハ苦て孫を生ず
大小腸ハ内を示ト〳〵引き通し能く洗ひ清し
生肉〳〵塩梅つけふる抜剛の蕎麦とつのよき
程〳〵ふ扎り蒸焼ふし小口切ふなし皿へ

り宴饗の時はもちふなり
皮は外ふ買込る職人ありて町より仕入れ
なれども不ふ持込きなるゝ皮ふ割裂して
賣物とす從くの品牛皮あれども
もの多し古れ牛皮浮山あるゝ故安価し
其ほかの多くの肉は店の内ふなべて置き古牛
立ナ印紙れ九本と庶(ス)べて置買ある人々の
先づ次第ふもちふ用ふうけて賣きたり也

牛の屠りて仕割まるゝ故ふ
ほふ入るものなり ブラーツケ ヤコーテ 柳
四足を待りとき吮(ノドヘ)をさし通すと呼
一牛乳を米常ふ多くの食料ふ和し食ふこれを(モロロ)
とい揚ふられ醍醐酥酪なり和漢ふて ボートル といふ酪
なるべしかるものをカーズ といふ是酥なるべし共ふ常食ます
諸ふて賣買して牛乳汁をとるふ先牝牛の
乳ふ犢(コウシ)をつけ置少し吸出させて搾出し
搾退て人牛母牛の乳ふさふ手をとり後り出し

桶へ溜メおきて久しくとけいかきまぜて又牛乳
汁より油を取是又料理用に用ゆ　ましをマスラ
といふなり

ヤコーテ　ブラーツケミ　馬乳ともものむよし大ひふ
酪ふものなりときまり　トンゴス　牛鹿の乳
ともものむといふ

一カポーシカ　といふ茶あり　牛酪ふ　コウリナといふものと拵ふ
コールハ和菓茶の類をいふ和菓の一種を牛酪にて苔生せ
者の茶と名とをつらねふ　コーリナといふも俗称のオタシナシヤ
ガタラナ　と
思ひたまへ

ましを細ふ割こ麦粉を加へ拌セ塩を
加へ大樽ふ仕込置少し酸味を生ずこれ亦の
大小ふよりて多少ハ何ほとも作り給へさる
亦なし牛肉ハ什物にして煮食ふこと水
式升ハ入れハ此物拵ふ牛酪　全しこうきまぜし
肉を入れ煮籠ふ入れ蒸しら籠を竈ふ入れ蒸しらき
ふし煮和して立出し汁と肉を俗せて麦餅ふ
浸して食ふなり　豆の食ひ方あれハ麦も
又あるにて食ふなり　蒸餅ハ日

米の炊飯は物に味噌汁を掛けて食す同し
粕なり又は菜にて作りたる醤の漬もの全く日本
の味噌に用ふ似たり牛肉は土人毎日に食料と
但し精進日は牛肉並に一切四足の肉をとらむ
唯魚鳥の肉野菜に類たる用ゆる羊の類
常人多き者は
食するなり
精進際齋といふは四足の肉と禁食せるもの
魚鳥は活たるの物と共に扱魚類は煮て蒸焼

ふ〜しても食す魚は小麦に粉ふりて
蒸焼ふ〜して食す魚は衣ふ多くあり粉魚の油にて
也もふ甘味ふなるあり魚類は川魚に鮒魚あり
サーモーリヨ湖より漁りする才、モソ鮭ふ似たり
といふ魚は アルス あいあめふと似たり云魚 オシヤテレナ 全く鮫に似たり
といふ大魚の類食料となす皆塩漬なり乾魚を
も用ゆれとヨーカラといふ 物産の部に詳なり
一雞 雁 鶩 鵞の類は畜置て食料とす故ふ

畜置ふるもの〻百羽あれば百つの雛を育てる
秋の比ふなれば親を殺て捕ふし殺へしとき
多分精進日等ふ事ふ扱生業に置る雛を
其其秋ふ至れば又長生して其用ふ〻ろなり
百羽いつも百羽ありて用を欠さるつもりふし
ふるものゝ内ふ稀に成る類五百羽も七百
羽も畜ひてあり インジイカ コーレッ」といふ名称
貴むて上食とせ 按ニカラクニテカ印繻雞と字申 されば冨家ふ行
されば畜なす又常人〻用ひるせぬなり如何拵の
多家ふても鶏〻十羽程つゝ畜ひ置也
一蕎麦〻挽割ふして用ゆるれば高麗物も挽
割ふしてあり杉ふ〻しらるものゝ多し 粥ふ炊き
牛乳汁とさゝして養ふ
一麻仁唐松実の汁あり 汁汁〻精進日ふ使ふ
一塩〻山塩なり味海塩ふかるるものなし西国
より出る

一精米（ハクマイ）牛乳ふ水を加へ煎ふまして牛乳沈澱
さし宴饗の時なと弛者の終りふ出せる小皿ふ
大のめ〳〵盛し沙糖を加へ食するもあり
米ハ赤げみて南亜墨利加乃地方より出る
品のよし精米して交易せる以地にて式合五
夕程にて細粉而枝程なり（ちれ紙沢を指也）米粒細
くして風味ハ好し
一菓蔵ハ細くして短し風味日本ふさして劣す

生にて甘き塩と麻子油をさし精進日ふ
用ふ胡蘿蔔（ニンジン）ハ夢て食ふ薯蕷ハ形圓く色赤
し生にて食ふ味甘し
一乾生姜と焼蕃椒（トウガラシ）ハ唐山（カラ）より此交易物ふ可
以地の人と蕃椒を好ミ食ふ解毒の和方と
いへり唐より やきそうかしふし第八ふして其
なり菓も加し此菓を用ひ胡椒も見ゆこれを
何方より其事や不知

一コーヒイ」といふものあり其実のごとし蠶豆(ソラマメ)の如き
ものなり「ムスクロ」は都のごとくにあるに依て
てあり市店にて賣物とす重く物り粗末ふして
布袋ふ入れ袋と器へ受け袋の口より熱湯を
注ぎ出し湯ふ牛乳とさしてのむ又鶏卵砂
糖を入れまぜ煎じて飲なり如此ふして朝夕ふ
されをのみ振舞の時あるも出て者し常〳〵
客りふのもす出中等以上の人は用ゆる

按和蘭コーヒーボイニ」といふ別ふ譯述あり
一ヤーボルキ」といふ園き芋あり蕃美色肌好芋に似
ふり

桜和蘭ふりいふアルドアップル」あるう近其種子
を植へ吾邦ふも稀ふ生て者れ果して
ヤーボルキあるや否と者た
されをすりいせて乾し細末者ろるの紙ヤーボルキ
ムツカ(杉)といふ芋粉碗一ッ程ふ小麦粉弐升加

入し製〳〵て菓子とあるもの所り

土地の風俗にて 所製〳〵白粉を物りかくふ

生粉い已 此物なり 風俗の部に載

一酒い麦て麦釀酒(ムギザケ)なり生こにて造る他方より生る

もの也あり 他国いハランソースケ、アンケリ等より生る

上酒也所り 梅と葡萄 酒あるこし ダラヒセライ」として酒食を販(ウリ)

人と遊び楽む所あり 生国ふい諸国の名酒特に有

一甘き酒ふ エンシナ酒(サケ)オハツカとして甘きものを下戸あと

飲ゆ又魚蟲を漬(ツケ)ける形状せる酒沢

シペリ」といふ也

一煙草土地ふ産せ刻こ煙草ふい唐山(カラ)より来るこし

唐より来ふい 油くさく光ゆ 此国の人多くい喫煙(タバコノム)せ習俗なり上

人ゞまれ〳〵一二吸てなくさみふのむ容子なり

ヤコーテ」ブラーツケ」ハ甚好こ吸ふ 中国れ女子も

絶て喫煙せ者れ

一嚊煙草(カキタバコ)といふ物あり 是煙管を粗末ふ製也

器に入置炉と鼻に引きて嗅くこれも女人の用
ひたるなり老婆抔苦生の為てかきて涙とされ
涙とあらしめ所のものとえらみ

按に鼻煙の事蒭録に詳なり

一航海(フナワタリ)を常とする者は必ず煙草を薫服せざ
ツンガ病(ツンカ病のこと)といふ病を避んが為なりといふ

一食事の仕様は婚礼宴集の話を録せず不思
議なれども食盤(ハンダイ)を置く形は四角圓盤長角又円とも是

いろいろあり器に盛る食物を盤の中央に置き抱盤
の四つに人数程椅子あり各これに物をうけお
のおの膳を置かれ前に皿を置かれ中
央の食物を所にて盛る食ふもの皆箸を使ふ少力
又食匙(クマテ)の三道具(図下にあり)を置き皆肉に力をて
又を添てきり又ふさりて食べ汁(ヒルケ)の物は匙にて
すくひ吸ふ其食法は箸と匙あれども匙は多くは
いふものにあらず酒あれども多くは
手を使ふ侍ふ食盤は上面に白木綿を敷く(これ皐被なし)

又鍋と申ハ幅廣のきれを横へ角勝を取しそ
食事を見ゝ食物おの〳〵汚れ内こゞれ汚物を始
せく為と云事

牛肉等入れて
炒ふ食と者る
鍋の図

鍋とのせて竈の
内へ出し入まする
鉄器の図

食盤三ツ道具圖

服飾第三

衣服ハ官爵の等級ニよりて種々かはりあるものと
なれども詳なるものを挙ぐる皮職の類ハ
の物源太等滑谷弁彼地ハ用ひて以度持ち
まとる物ハ手くさを圓扶せるもの左のかしこ弁彼
ハ如しとけるものとして正面のこと物袋しもあり指
其れるものハ正面と正扶(モテヒヲウ)と圓側ハ傍書するかしこ(カタテ ユツノワキ)
正面なきものハ

トロッポカ」といふ綿入のかきあれあり皮裘なり毛を
内ふ〳〵て表る上着なり毛の鄙の河辺にいなすしと
シウバ」といふ　セリトーカ　夏用る單衣なり商
人なと表用る　ハラーテ　上表　ポロケ　麻布にて
作りて　シタイイ　半股引の下タ〳〵なり　チュルケイ　ぬし
やを組ふ〳〵て足より膝を覆ふる　サパキ
といふ物をたくこれい革にて作る鞋にて膝を
覆ふ　オルカヒツサ　革にて作る手袋　オルカヒツサ　手なり

ペリチヤツカ　夏用る手袋　バシマキ　夏用る皮帽
所具なる蕭國多くい草なり　ナメシガヤマニ　綿羊皮　内〳〵毛なれ
事を入る我鳥雁の毛なり　上ホとまるものい鷗の毛
張松皮　ホとゝとそ　松い菌の焼きもの　傾基先しプーピ　四貫目
く形状にして大小の区別ある之なり　松蕭國
ふ中人以下い赤皮なる毛多羽毛を入る細羽芝い障
去なり皮松皮蕭國なり　四人名携なり　帽子
を紙きなる　上へ表て寝る蕭國い　オジアラといふなれ

皮い用ひる國のやうし

一シラツパ　笠帽なりらつたの毛又兎の毛を作る型(カタ)ありてすきまる物のやうし　織人〻半毛を織る

を用ゆ　ポロトーカ　深拭(ハナフキ)　是俗中之出る　ポロトーカ　是俗中之出る　ポロトーカ　深拭　是俗中之出る

カルトース」を云ふ　セイチカ　蚊を防く為

シラツパ　和蘭ふいふ　ポロトーカ　ノイス　ズツク　なり

冠りの面被れ而をすくし節のやく作る物

彼地山野路程常ふ蚊多くは物を冠るべし

凌きかゝしといふ第二の者ふ國あり

オロシイア國昔時の衣被を　サラハニ　といふ田舎

めきらる形なり　云六十家の婦人今時も是用

ゆるものあり　中奥蘭国は光常玉井の衣被を

今の用ゆるやうふ　段華せしと云　襟　袖口あるいハ

帽子は縁(ヘリ)額(ヒタイ)ふあるべし　ふふいコージキの毛皮にて

つけるべし　コージキ　東北海ふ立海獸　上等の人は

ポフロウ「らつた」の皮を用ひる

此度日本使節レサノツト」の彼の肩前の左方に
付多きせられ等形にて銀線にて作る物
をズウイヅタ」といふ星象の又肩より垂て輪袈裟
のごときもの」をレンダ」といふ官位の印にて
官位高き人階級ありて赤色と青色とあり
帝王用ゐ給ふ青色なり外に六人のセナアツケ
といふ大官の人青色を用ゆる青色を用ゆる
帝王と共に七人のみなり凡て彼等に大抵
同様のようなれども冠に施す羽毛の色にて官爵の
尊卑分るなり也羅紗天鵞絨の類に農商工番
小卑賤の者も常服とす綿布に布て表するもの
ありて是上地ふ木綿類を産せず綿布を毒物
とする故なりとて綿布の類に多く唐山より交
易して上等の人に貴重れ絹布を表服とする也
玄毛織の類も上好の品を用ゆ
兎の皮（兎をハカシカンといふ）ハ柔にして暖かなる物なり皮を

剥きたる衣服とあるす　内ハ食とす也て猫皮ふ似たるもの、食料とせり
ソーボリ　貂　止白里（ヒビリ）地方の名産にて皮裘
高上好とするもの　バイカル湖畔トンゴス
射とるもの　ふ上品とあり　俄羅斯皮と優き金色
イルコーツカ近山　ふるものと扱ふす品
得る物とす
指環（ユビカネ）ハ男女共ふ穿て左手の無名指ふ
貴人ハ金銀玉石をちりばめあるもの也卑賤の
者ハ黄銅鋼角なり　これ彼地方の風俗
玉中の女子幼少より耳の垂珠（ミミタブ）に穴を穿ち
金銀玉石の珠を糸ふ貫き垂孔ふ吊下け
垂りて首飾とす　中人より以下ハ黄銅の類を
用ふ
王宮（月見）の節中國帝の上品ふ倣ふ
藍ひろめと　たいふ屋敷　色紙羅紗なり　彼国ハ
黄ふ振ふ皇帝と人の　いろと
振多くハ色なり
レンタ」も黄色黒ハ　紅緑なり　梅セナーツケ」

六人ハ笠帽の角ハ者人と称すること定まりて貴
官ハ冠の事知るべし冠ハ上面ハ小星つゝ位ハ
よりて以黒金銀黒錦等行り正中ハ高くして
色ハ羽ハ次第あるよし赤青黒深ら色
元〻ハ元て貴人のしるし」ハ織物にて赤色い
ろ〻あり「ズウイヅタ」も服の左ハ方ハつゝ以
「ズウイヅタ」ハ先伝ハ進めハ王より賜ふと用ゆるあり
又罪人求め用ゆる行り貴爵ハよりて「ズウイヅタ」

たゞ付ける人あり「レンタ」たゞ用ゆる人あり相位
卑くても王ハ分ちゝく親ける人あり位高くても
常に近侍ハ出ぬ人あり（内官外官の区別なし）
「ハ帆」の前行ものレサノット」の館へ行きし貴人
影〻暇乞ハ其多とハ元ハ皆「ズウイヅタ」の彼
と共に行り「諸役人多へし
「レサノット」も侍「役」ハ出ハ用ハ「ズウイヅタ」
の彼肩ハ付ける「レンタ」も國王より賜ふ

なりとき事あり

衣服の制度さだめ立るなり〳〵

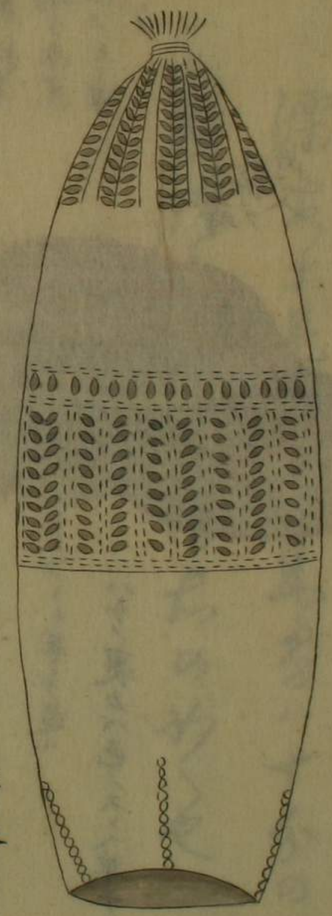
漂客おもに異なるハ十分の一なるし

物語まとの差別たのみなり也

漂客帯来冠帽衣服諸圖 共二十八

カリトース　革帽子　道中専コレヲ用ユ

カリパーカ　メリヤス頭巾　メリヤスノ如クアミタルモノナリ



此帽子在宿ノ時ハ男女共ニ冠ルナリ寝ルトキモ冠ル
按ニ和蘭ニハ「スラープ　ミツツ」トイフ睡帽ノ義ナリ

此ヲリメヨリ内ヘ折込テカムルナリ

ヲリパーシカ
肌ヘツケテ著ル繻半ナリ
麻ニテモ作ル

濃淺黄木綿
繻半襟總共
色

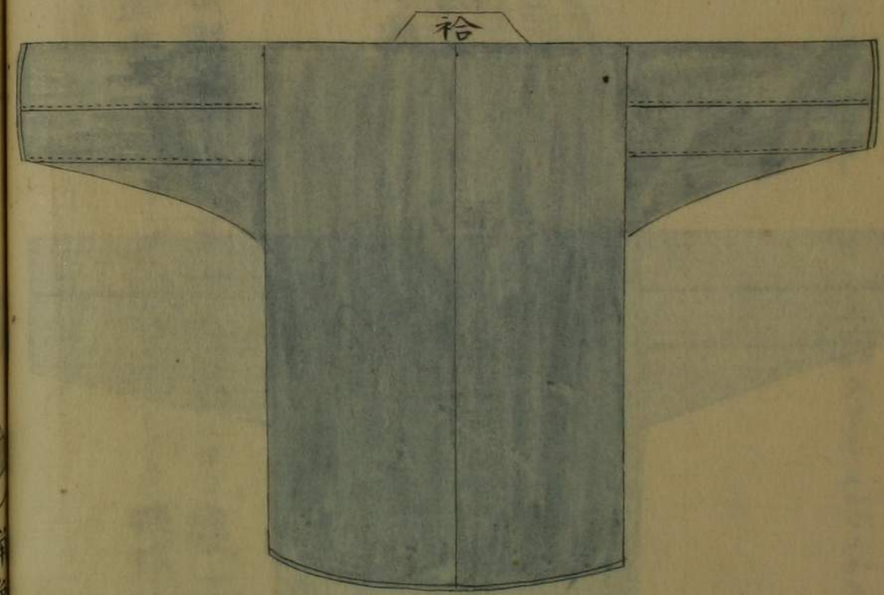
ガミゾー

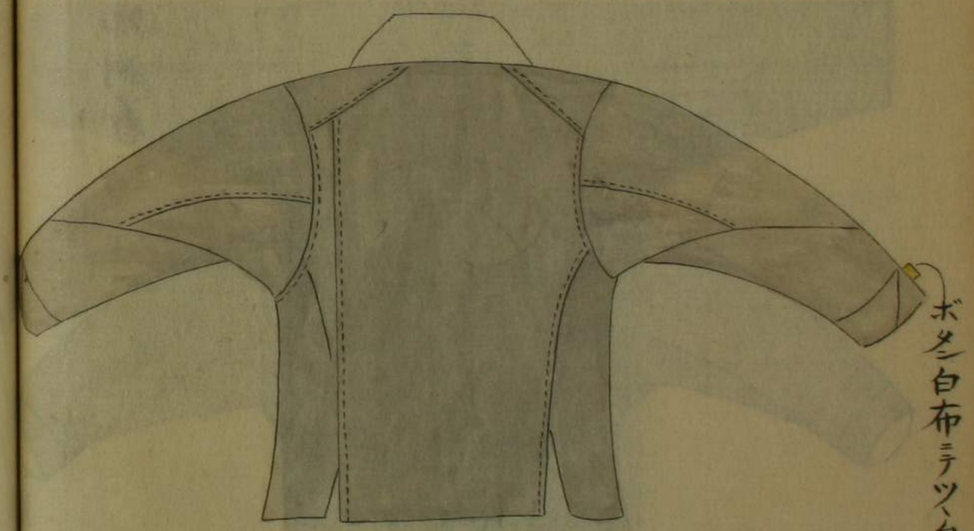
木綿胴着

ボタントモキレミテ
包ム
ホーコリザト云

前色袖

背面



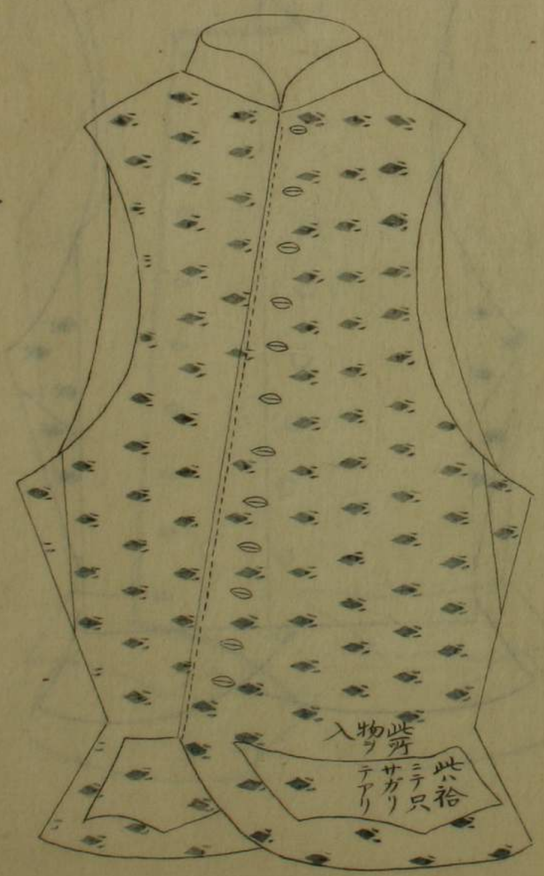


フハイカ 胴着 白地形付胴着

ガミゾト同フメ
仕立少シ違フナリ

左袵右袵共ニ
ボタントボタン孔ト
アリテ左袵ニモ
右袵ニモナルナリ

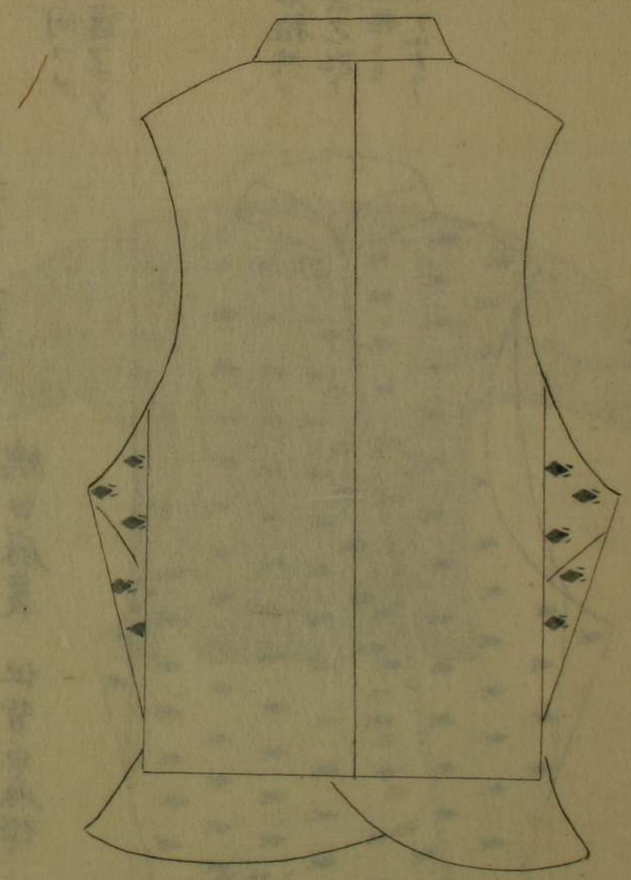
表白チリメンノ如キ物ニテ縮ミ正シク
總白麻裏 但背白麻禪



濃紫
白
淡紫

紫ニテ如図紋アリ

背



ガミゾ　羅紗胴着

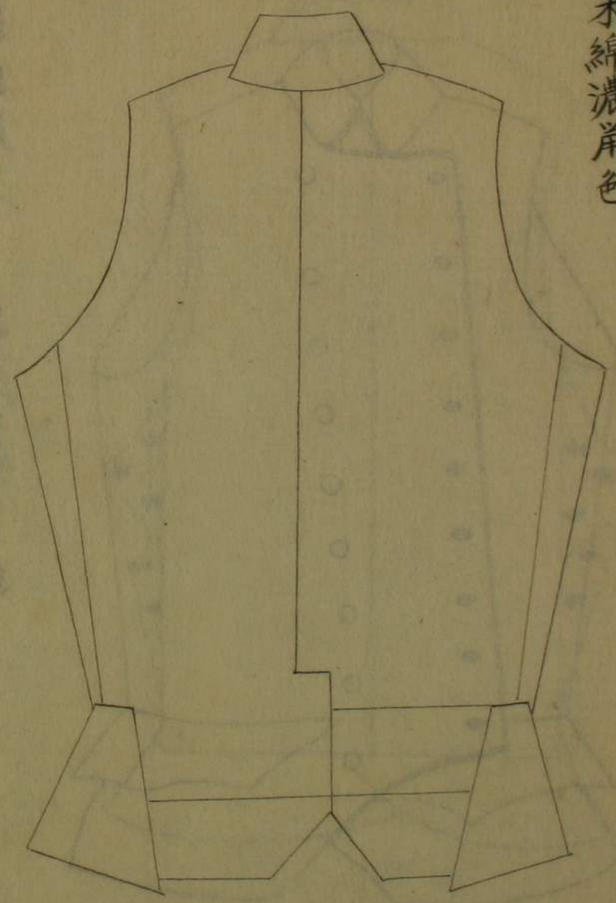
總裏濃鼠木綿

總表紺羅紗
ボタン流金　縁絹茶色

青
背の方切れてきらめる恐

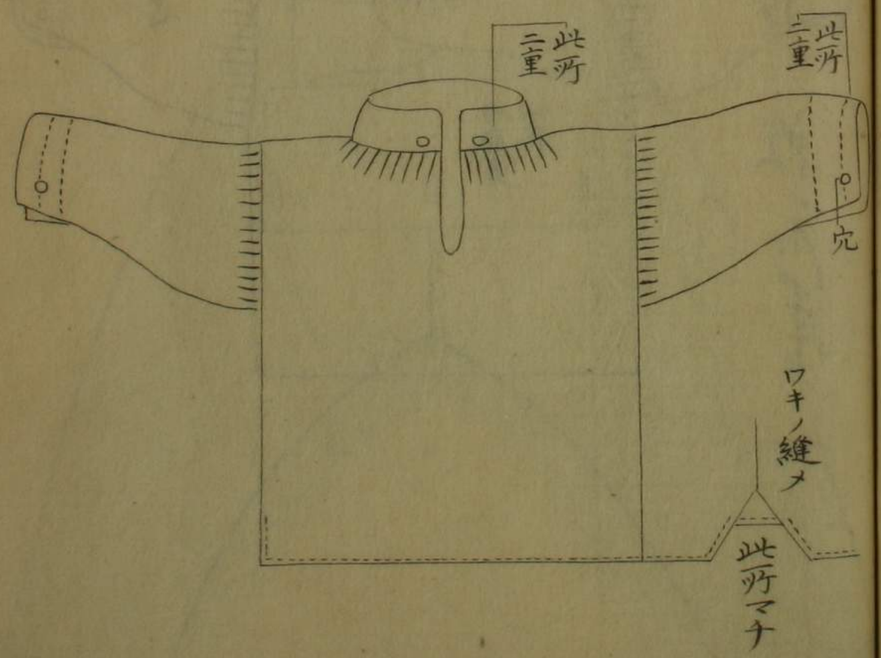
背

木綿濃胡色

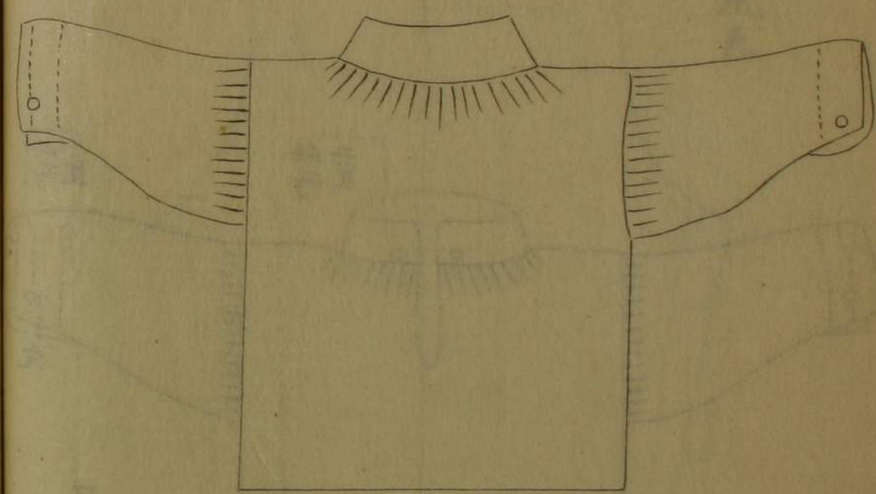


ヲリバシカ

白麻裃(ヒトヘ)繻半

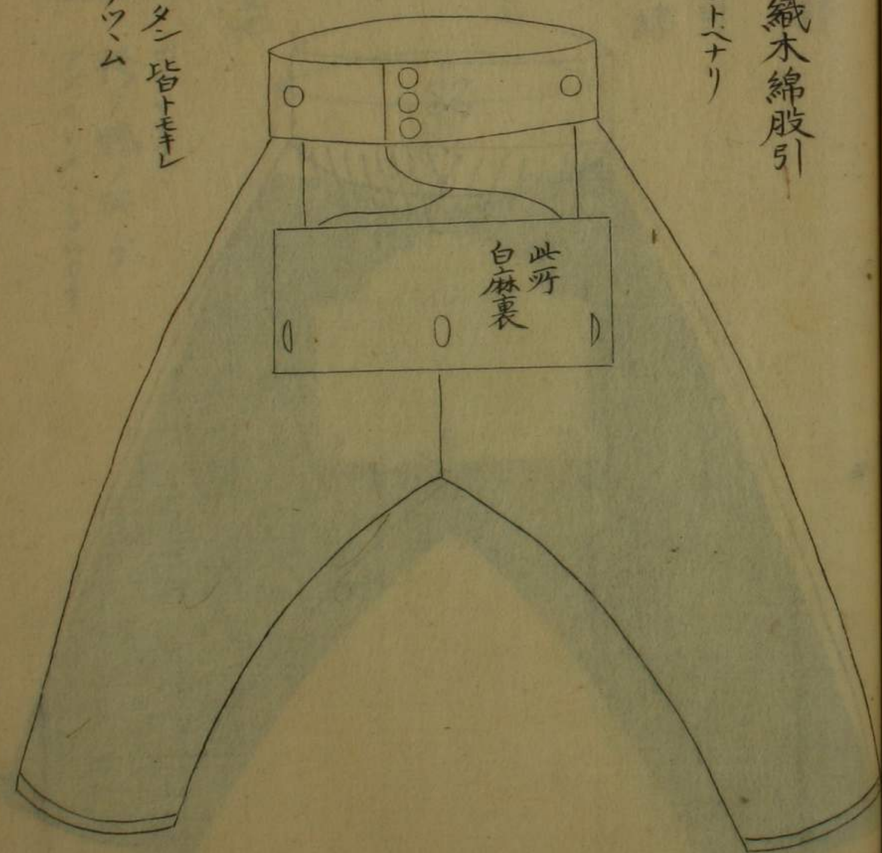


背



シタノイ　カスリ織木綿股引

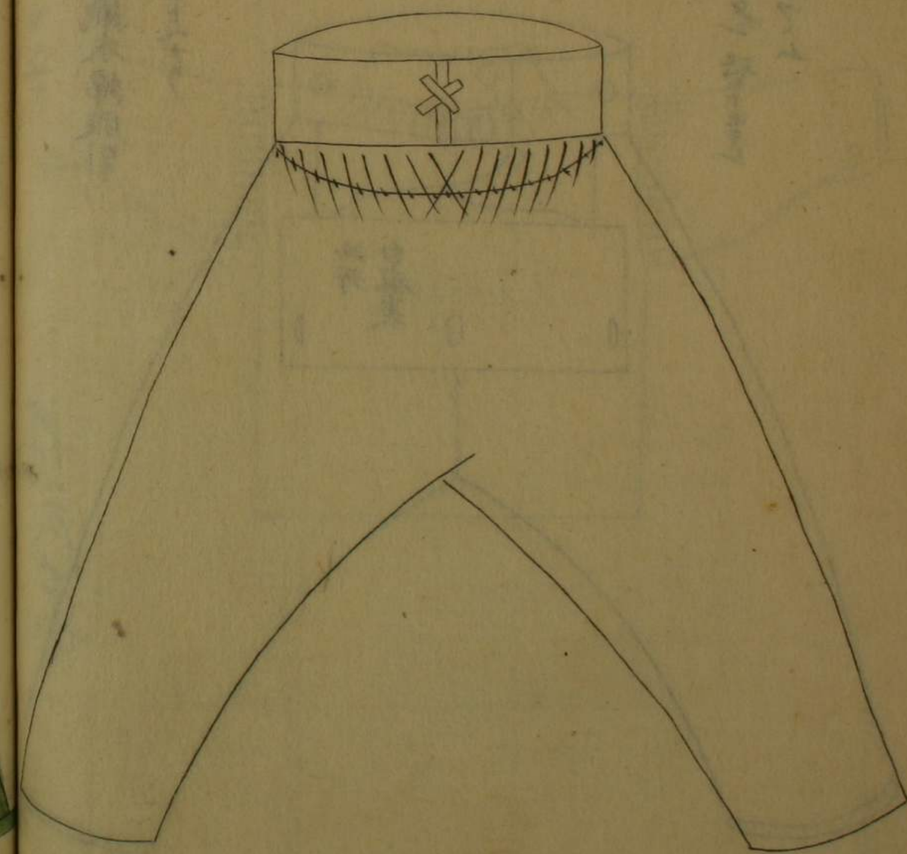
肌ヘツケテハク股引ヒトヘナリ



トキヲ
渡辺墨

背

紐白麻



シタノイ　半股引

紋織木綿股引

總裏白木綿

ボタン トモキレ
ミテツくム

ビラスケ二ツ締金也

ゼリヤツケ
袴ヲ膝ノ所ニテ
アブミトメルカネ

シネリ

縫詰合羽

背

シタノイ

崩葱羅紗股引
總裏白麻

ボタン左右
ニツシヤリ

此ボタンミツ
共ニトモキレ
ミテツくム

背

左右袖ノ内ハカリ
白麻裏

シヤリ

紺羅紗縫詰
合羽

背

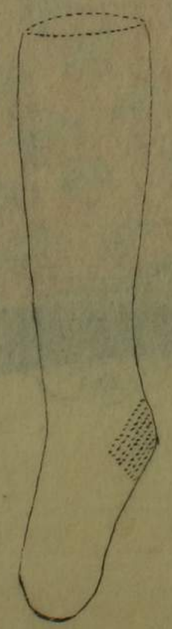
シタノイ　薄羅木綿股引

背

背

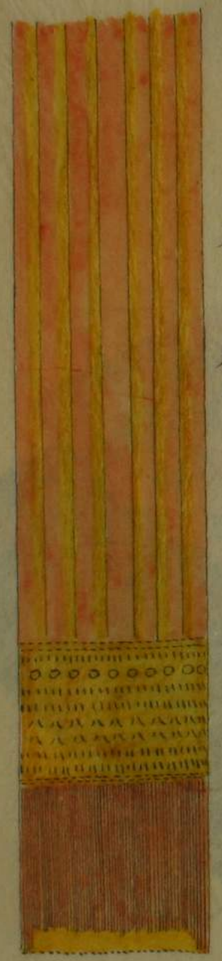
チヨロケ　白木綿足ノメリヤス

チユルケイ　メリヤス組ミテ是ヨリ膝マテハメルモノナリ其上ニハ革ニテ作リ名織サバキトイフモノヲハメル



シヤーカ　茶色木綿帯　田舎ニテ　セリトーノヲ着名上フミメルナリ

ヒダトリメム



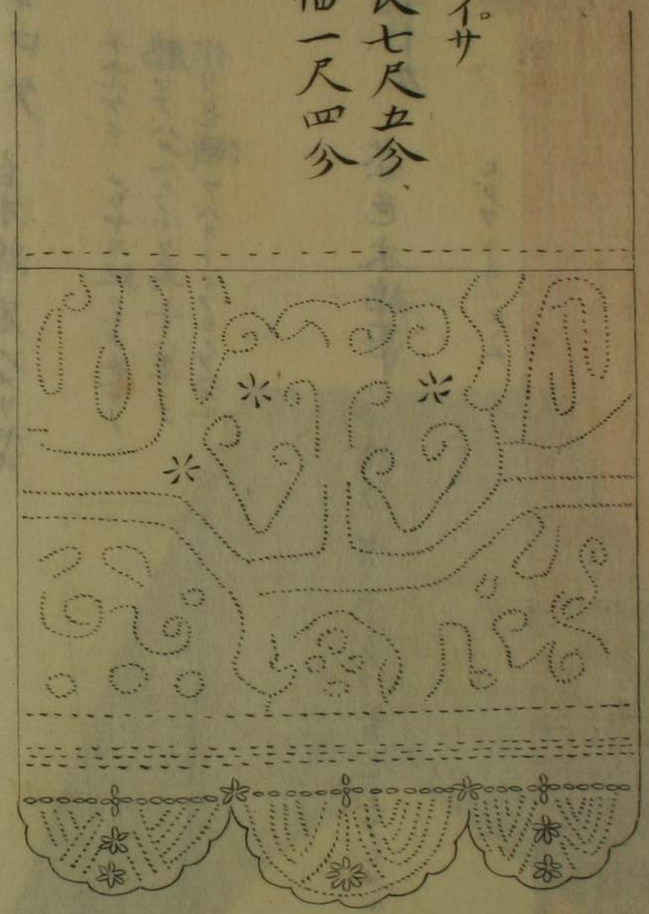
両ハシニ如此カザリアリ

フサ共ニ一丈一尺六寸九分

ポロケンツサ　白麻手拭

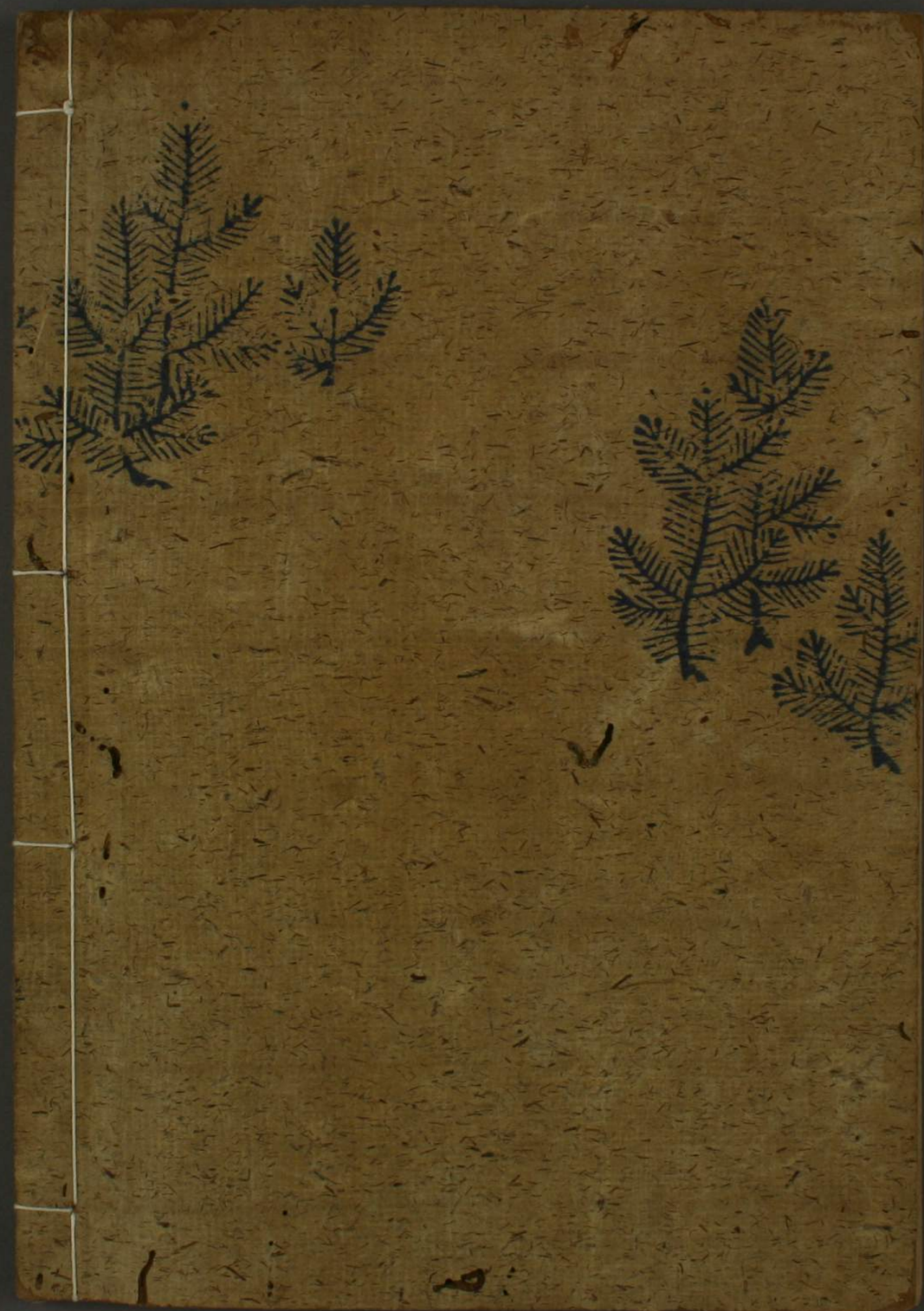
モノニカケオキテ手ヲフク ナリ

ポロケイサ
長七尺五分、
幅一尺四分



両端如此カザリ
メリヤスノ如キ絲
ニテクミタルモノ
ナリ

ヲチセアラ

サラサ蒲團
内ニ鳥毛ノ
如キモノヲ入

環海異聞卷之四